

西洋中世における二つの天上位階

下園 知弥

はじめに

中世を代表する神学者トマス・アクィナス(c. 1225-1274)の主著『神学大全』*Summa Theologiae*¹には、天使を扱った多くの問題が存している²。トマスが取り上げた問題の中には、今日の神学・哲学では中心的に扱われていないものも含まれており、天使たちの間に存する階層的秩序、すなわち「天上位階」*celestial hierarchy*³の問題はその内の一つだと言える。古代・中世の多くの思想家がなぜ天上位階に特別な関心を寄せていたのかはそれ自体思想史上の大きな問題であるが、本稿ではさしあたりそれを直接の主題とはしない。本稿の主題は、トマスが天上位階を論じている主要箇所(『神学大全』第1部第108問題⁴)において言及しているところの、二つの異なる天上位階、すなわち、擬ディオニュシオスおよび大グレゴリウスという、中世初期の、東西の両権威が主張したところの天上位階についてである。

概して言えば、西洋中世において、大グレゴリウスは7世紀以降、擬ディオニュシオスは12世紀以降の天上位階論に大きな影響力を有していた権威である。また、両者の説の調停者であるトマスは13世紀を代表する権威的な神学者である。従って、擬ディオニュシオスおよび大グレゴリウスという両権威の説がどのようなものであるか、両説をトマスがどのように受容したのかを確認することは、単なる三者の比較研究に画定されず、西洋中世における天上位階論、その歴史研究全体に大きな意義を有する。

考察の焦点は次の二点である。一つは、内容的な問題、つまり、擬ディオニュシオスおよび大グレゴリウスという人物はどのような天上位階を提唱した

のか、そしてトマスは二人の異なる主張をどのように解釈し自らの天上位階論に組み入れたのか、という問題である。いま一つは、歴史的な問題、つまり、両者の位階論がどのような歴史的過程を経て形成され、後世にどのように受容されてトマスにまで至ったのか、という問題である(なお、論文題に示した通り、本稿における歴史的過程の中心は西洋である)。思想内容と歴史的過程、この二つの問題は言うまでもなく不可分に結びついており、どちらを欠いても理解は不十分なものとなる。ゆえに本稿は両観点を共に扱うかたちで論じている。なお、本論の時代的な終点はトマスであるため、彼以降の天上位階論者——たとえばダンテなど——については考察の対象外とする。

1. 古代における天上位階

天上位階とは、簡潔に言えば、天に住まう者たちの階層的秩序を意味する概念である。天に住まう者たちとは、ユダヤ・キリスト教で言うところの天使・御使い(羅: *angelus* 希: *ἄγγελος*)であり、ある種の霊的存在者のことを指す⁵。つまり、神と人間(地上的存在者)との間に諸々の霊的な中間者が存在し、彼らの間に更に段階や優劣の差異があるという世界観、それが天上位階なのである。そしてこのような世界観は、ユダヤ・キリスト教に限ったものではなく、多くの古代諸宗教においても見出すことができる。とはいえ、本稿の主題は、西洋中世、つまりキリスト教世界における天上位階であるため、その起源についてもキリスト教の枠内から見ていくことにしたい。

ユダヤ・キリスト教の聖書には、後代で語られる

ような体系化された天上位階の概念は見出されない⁶。後代の思想家たちは聖書の諸々の記述を典拠として天上位階を論じているが、それはあくまでも後代の聖書解釈であり、聖書の時代を生きた人々において一般に共有されていた概念だとは言い難い。では、キリスト教思想史において最初に天上位階を論じたのは誰であろうか。筆者の確認している限り、それはオリゲネスだと考えられる。

オリゲネスは、3世紀にアレクサンドリアを中心として活躍した最初期のキリスト教神学者である。彼はアレクサンドリア学派の伝統に根ざしており、アレクサンドリアのフィロンに代表される聖書の寓意的解釈という手法を彼もまた身に着けていた⁷。彼は、聖書の言葉を寓意的に解釈して、天使たちの職務と位階について次のように論じている。

さて、神の聖なる使いが存在する。それをパウロは「救いを受け継ぐべき人々に奉仕するために任命された仕える霊たち」と呼んでいる。また同じ聖パウロの書き物の中に、どこからとられたのか私にはわからないが、「王座sedes、主権dominationes、支配principatus、権能potestates」といった名が列挙されているのが見出される。更にパウロは、これらの名を挙げた後、先に挙げたものの外にも別の理性的な職務と位階が在ることをほのめかして、救い主について、「彼は、すべての支配、権能、力virtutes、主権、また、この世ばかりでなく来たるべき世においても唱えられる、あらゆる名の上に高く置かれている」と言っている。⁸

上記の箇所、オリゲネスは聖書におけるパウロの言葉を解釈して二通りの天上位階を提示している。これらは明らかに、新約聖書の次の二つのテクストを典拠としている⁹。

天にあるものも地にあるものも、王座**θρόνοι**も主権**κυριότητες**も、支配**ἀρχαί**も権能**ἐξουσίαι**も、万物は御子において造られたからです。つまり、

万物は御子によって、御子のために造られました。

『コロサイ信徒への手紙』1:16

(主はキリストを)すべての支配、権能、力**δυνάμεις**、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来たるべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれました。

『エフェソ信徒への手紙』1:21

オリゲネスの天上位階論の特徴は次の三点にあると言える。第一に、聖書の寓意的解釈が天上位階の根拠となっている点。第二に、職務と位階に即して天使が複数の階層に区別されているという点¹⁰。第三に、職務と位階に即して区別される天上位階には複数の在り様が考えられうるという点。第三の点には特に注意が必要である。彼は聖書に直接記されていない職務と位階の可能性をも示唆している¹¹。つまり、オリゲネスにとって天上位階の知識ないし教えは厳密かつ体系的なものではないのである。従って彼の意図は、聖書の言葉に隠された天上位階の示唆それ自体にあったと考えるべきであろう。

では次に、オリゲネス以降の古代の流れを見てゆきたい。オリゲネス自身はギリシア語でキリスト教思想を説いた人物、つまりギリシア教父であったが、その影響はラテン教父にもギリシア教父にも共に見出される。

オリゲネス説に類する天上位階を論じた人物として、ラテン教父では、ヒエロニムスとアンブロシウスの名を挙げるができる。ヒエロニムスは、オリゲネスの異端問題をめぐっての論争的文書でオリゲネスの挙げた天使の階層に言及している¹²。しかしそこにヒエロニムス自身の解釈や変更は特に織り込まれておらず、あくまでもオリゲネス説の紹介ないし消極的受容に留まっている。他面、アンブロシウスの天上位階は、オリゲネスの影響が見られる一方で、彼独自の、かつ後代に直接連続する要素も見出される。彼は『ダビデの弁明』*Apologia David*において天使に関する諸名を次のように提示している。

そして実際、主イエスは自身の威厳の力ゆえに、神に固有の充実のゆえに、豊かなのであった。そして彼には、天使angeli、大天使archangeli、力virtutes、権能potestates、支配principatus、王座throni、主権dominationes、ケルビムCherubin、セラフィムSeraphinが倦むことなき恭順で以て仕えていた。¹³

ここでアンブロシウスが言及している諸名は、オリゲネスが言及していた五つの名に加えて天使であることが自明である四つの名——天使、大天使、ケルビム、セラフィム——を足したものである。そして、その数と種類は、擬ディオニュシオスおよび大グレゴリウス以降の天上位階論で定式化されたものと一致している。しかしながら、その順序は後代のものと異なっており、加えて、この記述がそもそも位階的秩序を意図していたのかも定かではない。その意味で、天上「位階」論と見做せるかどうかは問題が残る。それでもやはり、彼の挙げる諸名がオリゲネス以来の解釈をふまえており、後代の天上位階論に繋がるものであるという点は、疑いようがないだろう。

ギリシア教父では、エルサレムのキュリロス、ヨハネス・クリュソストモス、ニュッサのグレゴリオスを挙げることができる¹⁴。キュリロスとクリュソストモスは共に九つの名を挙げており、グレゴリオスは天使と大天使を除く七つの名——ただし、奉仕者λειτουργοίを天使と大天使の総称として考えるならば、八つ(実質的には九つ)の名が言及されていることになる¹⁵——を挙げている¹⁶。次の言葉はグレゴリオスの引用である。

なぜなら、秩序立てられた軍勢が存するのは、地上を超えた場所だからである。そこでは、権能ἐξουσίαιは永劫に主たる座にある。主権κυριότητεςはあまねく治めている。王座θρόνοιは堅固に打ち立てられている。そして支配ἀρχαίは奴隷化されることなく維持されている。

また、諸々の力δυνάμειςは止むことなく神を讃える。セラフィムΣεραφίμは止まることなく飛びまわりその地位は変わらない。いと高く支え上げられた王座をケルビムΧερουβίμは止むことなく維持し、奉仕者λειτουργοίは御旨を果たし、御言葉を聞くのを止めることがない。¹⁷

グレゴリオスは上記の箇所、七つ(八つ)の天上の諸権力を詠いあげている。この箇所がオリゲネスと同じ聖書の記述に依拠しているのは明らかであり、そこへセラフィム等の名が加えられていることから、素朴な聖書の引用ではなく、一つの纏まった天使論として構想されているのは明らかである。とはいえ、アンブロシウスらと同様、体系的な天上位階論が志向されているわけではない、とも言えるだろう。

以上が古代の東西教父における天上位階論、その概観である。東西に共通して言えるのは、この時代にはまだ天上位階についての定式的な解釈が確立していないという点であろう。時代が下るにつれて「九つの名(階層)」へ収束しつつあるという傾向は既に顕れているが、それもやはり固定的な傾向とは言えない。このような風景が一変するのは、東方においては擬ディオニュシオス以降、西方において大グレゴリウス以降である。

では、これら二大権威のうち、まずは擬ディオニュシオスから見ていくことにしたい。

2. 擬ディオニュシオスの天上位階

天上位階の思想史において最も重要な位置を占める思想家は、疑いようもなく、擬ディオニュシオス・アレオパギテースである。彼の提唱した九つの階層、すなわち、上位から順に、セラフィムΣεραφίμ、ケルビムΧερουβίμ、王座Θρόνοι、主権Κυριότητες、力Δυνάμεις、権能Ἐξουσίαι、支配Ἀρχαί、大天使Ἀρχάγγελοι、天使Ἄγγελοιの構成は、以後の天上位階における定式の一つである。なぜ彼の位階が後に定式化されることになったのか。この疑問について

は、さしあたっては彼の権威性を以て答えることができる。

擬ディオニュシオスと今日呼ばれているこの人物は、研究では6世紀頃のシリアの修道士と推測されている。ただし厳密な出自は現在も確定されていない¹⁸。というのも彼は、自身の素性を隠し、使徒たちと同時代を生きた司祭ディオニュシオスとして一連の文書——ディオニュシオス文書corpus dionysiacumと呼ばれる——の記述を行っていたからである。ゆえに、当初彼は『使徒言行録』に記されるところのアレオパゴスの議員ディオニュシオス¹⁹、つまりパウロの直弟子と見做されていた。彼が『使徒言行録』の人物でないことが確定的に明らかとなったのは19世紀になってのことである²⁰。つまり、それ以前は、とりわけ中世においては、ディオニュシオス文書はまさにディオニュシオスの文書として、卓越した権威として受容されていたのである。このような背景が、中世の一人物によって語られた天上位階が後代に非凡な影響を及ぼした第一の理由である。しかしながら、理由はそれだけに尽きない。

ディオニュシオスを名乗る人物の天上位階論が後代に影響を及ぼしたより大きな理由は、内容の卓越性にある。言い換えれば、神学的な深遠さのゆえに、擬ディオニュシオスの天上位階論は後代に受け継がれたのである。ここでその全容を詳述することはできないが、以下で三点だけ、彼の神学および天上位階論の特徴に触れることにしたい。

第一の特徴は、彼の天上位階論が、彼以前の教父の伝統を継承しつつ、独自の神学概念として形成されているという点である。擬ディオニュシオスの定式化した九つの階層は彼の完全な独創ではない。ギリシア教父の伝統、さらに言えば聖書のテキストを典拠としている。その意味で彼は伝統の継承者である。しかし他面、彼の天上位階論には、彼によって初めて持ち込まれた要素も複数見出される。

一つは、三つ組(トリアス)、すなわち、上位の三組(セラフィム・ケルビム・王座)、中位の三組(主権・力・権能)、下位の三組(支配・大天使・天使)という分類法である。このため、彼の天上位階は従来よりも体系化さ

れた秩序概念として構想されていると言える。このような体系化された階層的存在論は、新プラトン主義の影響に拠るところが大きい。つまり、ギリシア哲学のより大きな影響が彼の思想的な新しさの一端を担っているのである。いま一つは、概念の術語化、すなわち、彼独自の神学的術語ヒエラルキア *ἱεραρχία* の案出である。ヒエラルキアの語源にもなっているこの術語——語源はヒエラルケイン *ἱεραρχεῖν* (司令する)あるいはヒエラルケース *ἱεράρχης* (高位の聖職者)だと考えられる²¹——は、彼以前の位階論に用いられていた秩序概念(ordo, τάξις)とは異なったニュアンスを含んでおり、そのニュアンスを彼は次のように言い表す。

私の考えでは、ヒエラルキアとは、できるだけ神に似たものになるところの、また神から自分に与えられた照明に応じ自分の能力に従って神を模倣すべく上昇するところの聖なる秩序であり、知識であり、活動である。²²

ヒエラルキアを語る者は、ヒエラルキアの秩序と知識で自分自身の照明の神秘を執り行い、許されている限りで自分自身の根源に似たものとなることによって、一般にある聖なる秩序を、神性の根源の美しさの似姿を露わにするのである。²³

彼はヒエラルキアを秩序・知識・活動の三重の性質を持った聖なる概念と定義する。そしてその概念の目的を「神を模倣すべく上昇すること」として、位階的秩序の知識を開示された者たちは「浄化、照明、完成」²⁴の活動によって神(自身の根源)へと上昇していく、と彼は語る。このような神秘思想の強調もまた、彼の位階論の新しさである。

第二の特徴としては、九つの階層における名の意味について、彼以前のどの教父よりも仔細に論じているという点が挙げられる。彼はその著書『天上位階論(天上のヒエラルキアについて)』*De Coelesti Hierarchia* において、決して短くない議論を個々の天使の階層

に割り当てている²⁵。その長さや細かさは、他の教父たちに比して、例外的と言って良いほどである。他の教父たちが天使の階層の一々を詳述しなかった理由は「答えることのできる人々は、答えてもらいたい。ただし答えの内容を証明できるならばである」²⁶というアウグスティヌスの言葉からおおよそ推測できる。つまり、天上の在り様は人知には明らかにされえないし聖書にも書かれていないという事実が、無闇な詳述による過ちの危険を避けさせたのであろう。そしてこの態度は至極当然なものであるように思われる。ともすれば問題となってくるのは、むしろ、なぜディオニュシオスは個々の天使の階層について詳述しようとしたのか、という点である。このような疑問に対しては、彼の次の言葉を参照したい。

天を超えた諸存在の階層はいくつあるのか、どのような種類があるのか、またどのようにして彼らのヒエラルキアは完成されるのかということ、厳密には彼らを神化することのできる聖化の根源だけが知っているとは私は思うけれども、そのほかに彼らも自分自身の力と、照明と、彼らの聖なる、この世を超えた、整然とした秩序は知っているとは私は思う。なぜならば、彼ら自身のことをよく知っている神性の根源がわれわれに神秘を教示したのは彼らを介してなのだということを、もし誰もまったく言っていないとすれば、われわれが天を超えた知性の神秘と知性のいと聖なる完成とを知ることはできないからである。²⁷

神の言葉が天上の存在の全ての特徴を明示する九つの名称で呼んだのである。聖なる事柄に関するわれらが聖なる伝承者は、それらの諸存在をそれぞれが三隊から成る三つの階級に区別している。²⁸

この言明から窺えるのは、理性の限界を認めつつも一定程度の可知性を主張するという彼の立場であ

る。擬ディオニュシオスは、その可知性の根拠を複数の言葉で言い表す。「神性の根源」「聖化の根源」「聖なる伝承者(ヒエロテオス)」等々²⁹。これらの源泉ないし仲介によって伝えられているからこそ我々は神秘を知ることができる。つまり、神秘であるがゆえに人知には完全に知られえず、啓示されたものであるがゆえに何らかの仕方断片的に知られるのである。このような立場の下に、彼は天上位階の個々の名について詳述を試みる。

曰く。第一隊について、セラフィムは「永遠なる運動の熱、鋭さ、溢れる沸騰」を示し、ケルビムは「神性の根源の整然たる美しさを観想することのできる認識能力」を示し、王座は「神から来るものを受け取ることに仕えるよう開かれていること」を示す。第二隊について、主権は「何者にも隷属しないもの」を示し、力は「雄々しく揺るぎない勇氣」を示し、権能は「よく整った混乱することのない整然とした秩序」を示す。第三隊について、支配は「聖なる秩序をもって指導する者であること」を示し、大天使は「支配とも聖なる天使とも交流する」ことを示し、天使は「天上の諸存在としては最後のものとして、使いという特性を有している」ことを示す³⁰。

以上の説明からは、神的な何らかの特性と天使の階層の名が関係付けられていることが見て取れる。つまり、擬ディオニュシオスは天使のことを、神に関することがらを何らかのかたちで開示しているものたちと見做していたのであり、その限りで為される限りの説明を、与えられた啓示に基づいて試みているのである。

第三の特徴としては、彼の神学体系における位階論の意義、その際立った重要性が挙げられる。擬ディオニュシオスは自身の神学体系を肯定神学・否定神学という東方教父の伝統に従って構想している。すなわち、神に関することがらを肯定を通じて言明する種類の論述を肯定神学に、否定を通じて言明する種類の論述を否定神学に、彼はそれぞれ分類しているのである³¹。この二つの神学は相互補完的であり、どちらを欠いても神へと正しく進みゆくことはできない。そしてこの分類において、彼の位階(ヒエラル

キア論は肯定神学——彼自身の別の言い方では象徴神学³²——の位置を占めている。しかも、位階論に充てられた著作はただ一つではなく、『天上位階論』と『教会位階論』*De Ecclesiastica Hierarchia*³³の二つが対となって体系的な位階論が提示されているのである。このような位階論の位置付けは、彼の神学体系における位階論の重要性の証左でもある。では具体的に、位階論はどのような意味で重要なのだろうか。

彼はヒエラルキアという概念の目的を「できるだけ神に似ることと合一することである」としている。彼の別の言葉を使えば、その目的は「神化」(テオーシス)である。神化は彼の全神学を通じての目的だと言えるが、神学の種類によってその道行は異なってくる。肯定神学を通じては、神と我々との或る意味での類似が導きの糸であり、否定神学を通じては、肯定神学によって認められたことがらの否定を通じて知性を超えた領域へと上昇していくことが目指される。ゆえに、位階論では神と我々との何らかの類似を見出すことが前景に据えられており、そのため天上位階論も教会位階論も共に、各々の階層に応じた神との類似の発見ないし言明が目指されるのである。つまり、擬ディオニュシオスにとって位階論は、彼の神学体系の一翼を担っており、また単なる秩序論ではなく神についての語りであるという意味で、重要なのである。

以上が擬ディオニュシオスの神学および天上位階論の諸特徴の概略である。簡潔に言えば、彼の神学は「神化」という目的に収束していく一つの体系であり、その体系において位階論は肯定神学、すなわち神との類似の言明という側面を担っている。そして天上位階論は、天使と人間(教会)という二つの類似者のうちの一方について、神との類似の在り様を位階的秩序の内に明らかにすることが主題とされているのである。

3. 大グレゴリウスの天上位階

では次に、大グレゴリウスの天上位階論について

見ていきたい。

大グレゴリウス(c. 540-604)は、中世初期のローマにおいて貴族の家に生まれ、青年時代までに多くの学識を収め、修道生活に入ったのち、教皇グレゴリウス一世として西方教会に多大な影響を及ぼした人物である³⁴。歴史的には、古代の教父はもちろんのこと、先に言及した擬ディオニュシオスよりも僅かながら後代の人物である。

大グレゴリウスが天上位階を論じたのは、主として『福音書講話』*Homiliae in Evangelia*においてである。講話homiliaという言葉から分かる通り、この著作は福音書の言葉の意味を講じたものである³⁵。後のスコラ学に見られるような概念の精細な分析は行われておらず、ここで目指されているのは、聖書から汲み取るべきメッセージの生き活きとした表象である。具体的に、彼が『福音書講話』で天上位階をいかに表象しているのかについて、これより確認していきたい。

大グレゴリウスは、『福音書講話』第34講話において、『ルカによる福音書』から二つのたとえ話、すなわち「見失った羊」と「無くした銀貨」のたとえ話を取り挙げている。前者の概要は次の通り。——百匹の羊を所有している羊飼いは、もしそのうちの一匹を見失ったならば、九十九匹の羊を残して一匹を探しに出かける。そしてその一匹を見つけたならば、羊飼いは友人や隣人と共にその発見を喜ぼうとするであろう。この見失った羊は罪人のたとえであり、もし罪人が悔悛したならば、九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天において在る——。後者の概要は次の通り。——十枚の銀貨を持っている女性は、もしそのうちの一枚が無くなったならば、それを必死に捜そうとする。そしてその一枚を見つけたならば、女性は友人や隣人と共にその発見を喜ぼうとするであろう。この一枚も罪人のたとえであり、もし罪人が悔悛したならば、神の天使たちの間に喜びが在る——。これらのたとえ話は共に、その原義からして「悔悛」という倫理的な主題を扱ったものであり、大グレゴリウスの講話もその始めと終わりにおいては悔悛というメッセージの解明に充てられてい

る³⁶。ところが、講話の中盤、大グレゴリウスは聖書には直接言及されていない天上位階について長い議論を充てているのである。悔悛という講話のテーマには一見そぐわないように思われるが、その挿入の理由は彼の次のテキストに示されている。

主が地上で一匹の羊を捜しておられたとき、荒野に九十九匹の羊が残っていたということは、神を見るために創造されていた理性的被造物、すなわち、天使と人間の数が、人が迷い出でたことで減少したということである。こうして、主は、天における羊の総数を完全に戻すために、地上で失われた人間を捜されたのである。

[……]

さて、ここで、神の智慧を表しているこの女が、なぜ十枚の銀貨を持ち、そのうちの一枚を失い、それを捜して見つけたかという問題を取り上げないわけにはいかない。主が天使と人間の本性を創造されたのは、確かに、それらに主を認識させるためであった。そして主は、それが永遠に存続することを望んだとき、疑いもなく、それをご自分に似たものとして創造されたのである。それでは、なぜ女が十枚の銀貨を持っていたかと言うと、天使たちの階層が九つあり、選ばれたものの数が満たされるために、十番目に人間が創造されたからである。³⁷

つまり、(おそらくは聖書の「天において」や「神の天使たちの間に」というテキストに触発されて)九十九匹の羊・九枚の銀貨を天使として、見失った羊・失われた銀貨を人間として解釈することによって、大グレゴリウスは両たとえ話を「天使たちの階層から脱落した人間」というテーマに読み替えているのである。そうして九つの銀貨が意味するところの九つの階層へと彼は講話を進めていく。

大グレゴリウスは天上位階を次のように語る。(1)まず、九つの階層の名を「天使Angelos、大天使Archangelos、力Virtutes、権能Potestates、支配Principatus、主権Dominationes、王座Throni、ケ

ルビムCherubin、セラフィムSeraphin」として、その根拠を聖書に求める。そこで持ち出されるのは伝統的な『エフェソ信徒への手紙』と『コロサイ信徒への手紙』である——天使・大天使・ケルビム・セラフィムの名の典拠は、周知の事実として、わざわざ挙げられていない——。(2)さらに、『エゼキエル書』28:13に記された九つの宝石、すなわち「ルビー、黄玉、紫水晶、かんらん石、縞めのう、碧石、サファイア、ざくろ石、エメラルド」が天使たちの階層に対応していることに触れる。(3)それから、各々の階層の名は彼らの職務に由来していると述べる。(4)次いで、各々の階層の名について解説する。なお、ここで各階層の序列がセラフィムを最高位として天使を最下位とするものであることも明かされる。(5)さらに、聖書のテキスト(『申命記』32:8)³⁸を根拠として天使たちと同じ数の人間が天に昇ることを主張した上で、天使の各階層の特性に類似した人間が天に昇るのだと語る。(6)続いて、天使たちの上下関係や派遣の問題に触れ、(7)最後に、各階層の特性はすべての天使に共通していることを述べて、講話の内容を本来の主題である悔悛へと戻す。

以上が彼の天上位階論の概略である。講話の展開は単純であり、その内容は大きく三つのトピックに整理することができる。それは次の通りである。

- A. 天使の九つの階層の名とその由来について
(1), (2), (3), (4)
- B. 天使の階層と人間の関係について (5)
- C. 天使の階層同士の関係について (6), (7)

では次に、各トピックにおける大グレゴリウスの主張の要点を見てゆきたい。

まず、トピックAについて。ここでまず大グレゴリウスは「九つの階層」を提示している。九つの階層は、名と数においては彼以前の多くの論者と一致するものであり、しかしながらその序列は彼独自の基準に拠っている。影響関係の厳密な特定は困難であるが³⁹、この講話にディオニュシオスの名が出てくることから⁴⁰、彼はこのトピックを西方教父および

擬ディオニュシオスの影響から構想したのだと推測される。なお、少なからず彼独自の考察が發揮されている面もあり、それはたとえば(2)の『エゼキエル書』における宝石と天使との対応や、(4)におけるミカエルやガブリエルといった個々の大天使についての言及がそうである⁴¹。ともあれ、このトピックの要点は、天上には「九つの階層」があり、それぞれの階層には序列があって、天使たちの諸々の職務に応じて序列とその名が定められている、という点であろう。

次にトピックBであるが、ここで彼は、天上位階よりもむしろ人間の救済を主眼として語っている。別の言い方をすれば、トピックAで展開された天上位階論を、彼本来の関心事である倫理的な主題へとこのトピックで接続しているのである。ここでの彼の論述は、失われた羊ないし銀貨であるところの人間が如何にして神の懐へ帰りゆくかという点に集中しており、その意味で、本来的な主題に最も即したトピックだと言える⁴²。

最後にトピックCであるが、これは大グレゴリウスが主題とするところの倫理的な内容からは離れた議論であり、一貫して天使たちの秩序の解明に充てられている。内容は擬ディオニュシオスの語るところと多分に類似する。すなわち、大グレゴリウスもまた、天使の階層に序列を認め、各階層の特性がある意味ですべての天使に共通である——裏を返せば、神から与えられた特性の類似ないし分有の程度には違いがある——ことを肯定する。ここに見出されるのは、存在の階層および一者からの分有という、新プラトン主義的な世界観である。従ってこのトピックは、大グレゴリウス自身のというよりはむしろ、彼が影響を受けた擬ディオニュシオスの思想に即した議論だと考えるべきだろう。

以上が大グレゴリウスにおける天上位階論の概要である。要約すれば、彼の天上位階論は擬ディオニュシオス説の倫理的な主題に即した変容である。もっとも、変容の軸となっているのは彼自身の神学であり、結果として彼の天上位階論は擬ディオニュシオスのそれとは大きく異なったかたちで表象されている。

すなわち、「罪人たる人間を救済へと転回させるための天上位階」こそが大グレゴリウス説の核心であり、彼が説教を通じて人々に伝えようとした新たな表象なのである。

4. トマスに至るまで

2.および3.においては、擬ディオニュシオスと大グレゴリウスという、両権威の天上位階論を確認してきた。彼らの天上位階論は、天使たちの間に位階的秩序が存しており、その秩序が「九つの階層」として語られるとする点で一致している。対して相違しているのは、細かい点を除けば、「九つの階層の構成」と「位階(論)の目的」、この二点である。前者については図1および2で簡潔に纏めた。後者については、端的に言えば、擬ディオニュシオスは「神化」を目的として位階論を構想し、大グレゴリウスは「悔悛」を目的として天上位階に言及している、という相違である。本章では、両説が彼ら以後、トマスに至るまで、西洋中世において如何に受容されていったのかを見ていく。

まず、受容史の大まかな時代区分であるが、(1)7世紀から11世紀まで、(2)12世紀、(3)13世紀の三つに分けることができる。この区分は、西方ラテン世界にとっては(内実としては)外来思想に位置付けられる擬ディオニュシオスの思想、その影響力の変遷に基づく分類とも言い換えられる。すなわち、(1)大グレゴリウス優勢の時代、(2)転換点、(3)擬ディオニュシオス優勢の時代、という区分でもある⁴³。では、それぞれの時代の様相をこれから確認していきたい。

4-1. 7世紀から11世紀まで

先に述べた通り、この時代は大グレゴリウスの時代である。その理由は、教皇たる彼自身の権威性を挙げるだけでも事足りるかもしれないが、加えて言うならば、セビリャの司教イシドゥルスの貢献も大きいと考えられる。この人物は中世全般にわたって広範な影響を及ぼした『語源』*Etymologiae*の著者で

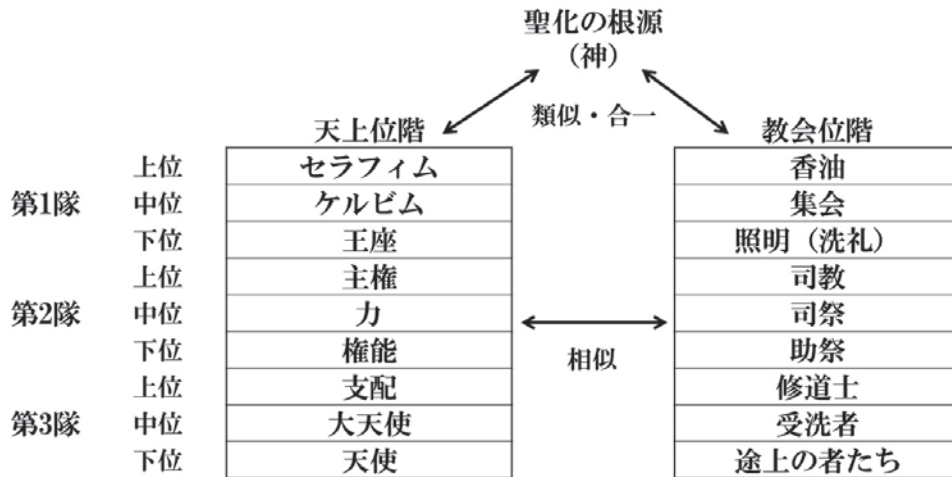


図1 擬ディオニュシオスのヒエラルキア概念(天上位階と教会位階)

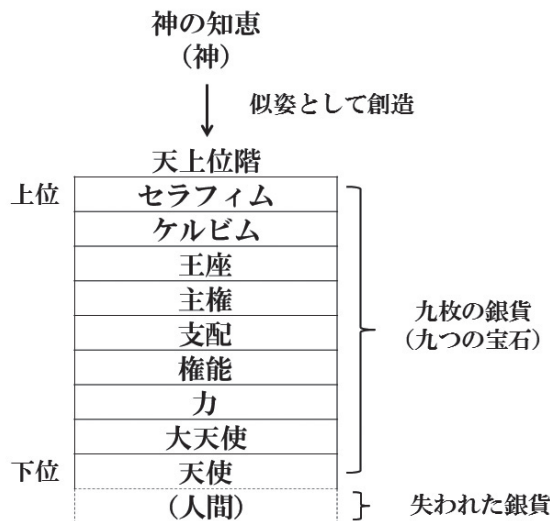


図2 大グレゴリオスの天上位階

あり、彼はその著書において大グレゴリウスと同内容の天上位階に言及している⁴⁴。もっとも、そこでイシドゥルスは天使の階層についての解説に腐心していて、大グレゴリオスの倫理説にはほとんど触れていない。その意味で、あくまでもイシドゥルスは平板化された大グレゴリウス説の普及者に留まる⁴⁵。ともあれ、イシドゥルス始めとする多くの聖職者によって大グレゴリウス説が権威的に広く受容されていたのは事実であり、それがこの時代の天使論の雰囲気を作っていたのは確かであろう。

擬ディオニュシオスについては、エリウゲナを除いて、その神学の目立った受容者は現れていない⁴⁶。もっとも、ディオニュシオス文書の権威性自体

は西方においても当初から認められていたところではある。たとえば、サン・ドニ修道院長のヒルドゥイヌスは、古代末期のパリ司教ディオニュシオス(サン・ドニ)とパウロの直弟子であるディオニュシオス、そしてディオニュシオス文書の著者を同一人物だとして、大きな権威と見做していた⁴⁷。ディオニュシオス文書を最初にラテン語訳したのも彼である⁴⁸。なお、エリウゲナについては、ディオニュシオス文書をラテン語訳し、『天上位階論』の註解も著すなど、受容史において見過ごせない役割を果たしている。彼の擬ディオニュシオス理解——「発出・還帰」と位階制が組み合わされた世界把握などはその最たるものである⁴⁹——は一つの神学として体系化

されており、後代の解釈にも影響を及ぼしている。

も存しないのだろうか？⁵³

4-2. 12世紀

エリウゲナ以降の擬ディオニュシオス受容では、12世紀の次の二人、すなわち『天上位階論』の註解を著したサン・ヴィクトルのフーゴーと、新たなラテン語訳を手がけたヨハネス・サラセヌスが重要である。前者の註解はエリウゲナの翻訳と註解を受け継ぐものであり⁵⁰、スコラ学にも参照されるなど、後代にも直接の影響を及ぼしている。「ギリシア語からの訳語であるヒエラルキアは聖なる支配の謂いである」⁵¹という彼の理解——このような語源的理解の傾向は証聖者マクシモスのスコリア(ディオニュシオス文書の註解)⁵²において既に見出されているが——はトマスのヒエラルキア論にも見出される。また、後者のラテン語訳は多くのスコラ学者に用いられたものである。この二人の存在は12世紀という時代が擬ディオニュシオス受容の転換点であったことを示唆するものである。

他方で、大グレゴリウスの受容については、それ自体目立った変化はなかったと考えられる。大学の登場によって修道院が学問の唯一の中心地であることはなくなったにせよ、修道院は依然として神学の中心地であり、その修道院において権威とされたのは大グレゴリウスのような教父たちであった。たとえば、クレルヴォーのベルナルドゥスは、ディオニュシオス文書も大グレゴリウスの神学も共に知っていたが、彼が優先したのは大グレゴリウスの方である。彼は『省察について』*De Consideratione*で次のように語っている。

名を持つところのものについて、健全な信仰によって思い巡らすことがひとに許されていないのだとすれば、天上の諸名が——天使、大天使、力、権能、支配、主権、王座、ケルビム、セラフィムというこれらの名が——知られるようになるのは何の故か？それらの名の意味するところとは？端的に天使と呼ばれる諸霊と大天使と名付けられたる諸霊との間にはいかなる隔たり

ここでベルナルドゥスは天使の階層の名を思惟することの必要性を主張しているが、彼はその根拠を「聞くことより生ずる信仰」*fides ex auditu* に求めている⁵⁴。聞くこととはすなわち、聖書の言葉を聞くことである。引用の箇所が続いて彼は諸階層の考察へと進んでゆくが、その内容は明らかに大グレゴリウスとイシドゥルスを受け継いだものである。よって、ベルナルドゥスこそは、西方教会の伝統の典型だと言えよう。

このように、12世紀は擬ディオニュシオスも大グレゴリウスも共に、自身の受容者を得ていた時代だと言える。とはいえこの時代、両権威を共に参照し比較検討するような傾向はまだ見られない。両者の説を共に扱ったものとしては、代表的にはペトルス・ロンバルドゥスの主著『(四巻の)命題集』*Sententiarum Libri Quattuor* を挙げることができるが⁵⁵、彼は両権威の説を対立しうるものとして提示しておらず、言葉の上での相違を検討しようとしているようにも思われない。その点は次の時代のトマスとの明確な違いだと言えよう。

4-3. 13世紀

概して、13世紀には前世紀に本格化した擬ディオニュシオス受容が更に進行している。ラテン・アレオパギテス主義なる傾向が現れるようになるのもこの時代である⁵⁶。擬ディオニュシオスの強大な影響力、それが13世紀の第一の特徴である。

また、12世紀ルネサンス以来のアラビア哲学やギリシア哲学の流入、とりわけアリストテレス主義の影響も見過ごすことはできない。13世紀以降、擬ディオニュシオスの天上位階の解釈として、聖書や教父に加えてアリストテレスの名も多く見受けられるようになってくる。その典型はアルベルトゥス・マグヌスである。彼は『ディオニュシオス天上位階論註解』*Super de Dionysium Caelesti Hierarchia*で、大グレゴリウス始めとする教父たちはもちろんのこと、アリストテレスやアリストテレス主義者の言説も数

多く引用している。マグヌスの註解に至っては、二つの天上位階と呼べるような拮抗関係は見出されえず、古今東西の学識を用いてのディオニュシオス註解という様相を呈している。このように、様々な学説により天上位階を理解するというのは、時代全体の、つまりスコラ学の一般的傾向である。この傾向に則っての天上位階論が13世紀の第二の特徴である。

第一の特徴も第二の特徴も共に、大グレゴリウスの影響力の減退を示唆するものである。天上位階論において優先されるのは擬ディオニュシオスであり、大グレゴリウスは権威でこそあるが次席に据えられる。このように明言する者こそいないが——後の時代、ダンテはこのことをはっきりと記している⁵⁷——時代の雰囲気こそであったことは、おそらく事実であろう。

では、この世紀の代表者の一人であるトマス・アクィナス⁵⁸の立場はどうであろうか。トマスが両権威をどのように受容し、天上位階を論じたのか。この点を中心として、次節ではトマスの天上位階論を確認していきたい。

5. 二つの天上位階のトマスの調停

トマス・アクィナスの天上位階論は、代表的には名著『神学大全』の第1部第108問題において展開されている。この問題の表題は「ヒエラルキアと階層とに即した天使たちの序列について」⁵⁹であり、この表題の下に、問題はさらに八つの項に分かたれる。そして第6項において、トマスは擬ディオニュシオス型序列と大グレゴリウス型序列の差異を検討している。よって、本節の主題と特に関係が深いのは第6項であるが、まずはトマスが全ての項でどのような議論をしているのかを簡潔に見ていきたい。

まずトマスは、第1項「すべての天使が一つのヒエラルキアに属するか」という問いを立て、ここでヒエラルキアの意味内容を明らかにしている。用語の上からしてトマスが擬ディオニュシオス説に則っているのは明らかであるが、ここで更に注目したいの

は、彼のヒエラルキアの説明の仕方である。トマスはこの概念を、「聖なる支配sacer principatus」⁶⁰と換言した上で、アリストテレスに即した統治体 principatusの解釈によって説明する。すなわち、統治体は、統治者(神)が一人であることに即してはただ一つのものであるが、被統治者(天使・人間)が多様な仕方で統治されていることに即しては複数存するものである、と。このようにヒエラルキアを説明した後、続いてトマスは、天使の認識における三つの段階と対応させるかたちで、天使が三つのヒエラルキア——上位、中位、下位——に属することの論証を行っている。結果として提示されるヒエラルキアの構成は擬ディオニュシオス説に忠実であり、その域を出るものではない。

第2項「一つのヒエラルキアには複数の階層が存するか」および第3項「一つの階層に複数の天使が存しているか」は、九つの階層より成る天上位階の論証が主眼であり、これらの項を経て、擬ディオニュシオスの説く九つの階層が(絶対的な、ではないが)真正の位階として証明される。

第4項「ヒエラルキアおよび階層の区別は天使の自然本性に由来するものであるか」は、ヒエラルキアが成立する内的根拠を主題としている。トマスの回答は、自然本性と恩寵という二つの観点からそれらは区別される、というものである。

第5項「天使の諸階層は適切に名付けられているか」は、諸階層の名についての考察であり、ここで初めて大グレゴリウスと擬ディオニュシオスの名が並置される。とはいえ、両説の階層は、その名に関しては相違するものでなく、トマスも二人の説を相互補完的に引用するに留まる。

第6項「諸階層の段階は適切に割り当てられているか」は、擬ディオニュシオス型序列と大グレゴリウス型序列の相違が主題である。これは後に詳しく見ていきたい。

第7項「階層は審判の日の後も存続するか」および第8項「人間は天使の階層へと引き上げられるか」は、擬ディオニュシオスの『天上位階論』で中心的に語られている内容から離れた議論である。これも後

に詳しく見ていきたい。

以上が『神学大全』第1部第108問題の主題群である。一見して明らかなのは、トマスの擬ディオニュシオス説への傾倒である。加えて、「神化」や「悔悛」ではなくまさに天使たちの「序列」こそがトマスの天上位階論の主要な論点であることも明白である。そしてこの傾向は第6項以降の議論においても顕著である。よって、これより第6項以降の議論を詳しく見ていきたい。

第6項では、まず主題に対する異論として擬ディオニュシオス型序列に反する複数の見解が並べられる——大グレゴリウス型序列はその最後に据えられる——、次に反対異論として擬ディオニュシオス型序列が提示される。そしてトマスは次のように述べる。

答えて次のように言わなければならない。天使の諸階層の段階をグレゴリウスもディオニュシウスも割り当てており、他の諸階層に関する限り彼らの割当は一致しているが、「支配」と「力」に関しては異なっている。すなわち、ディオニュシウスは「力」を「主権」の下かつ「権能」の上に据えており、さらに「支配」を「権能」の下かつ「大天使」の上に据えている。これに対してグレゴリウスは「支配」を「主権」と「権能」の間に置き、「力」を「権能」と「大天使」の間に置いている。そして両者の割当とも、使徒の権威によって支持を得ることができる。使徒は、『エフェソ信徒への手紙』第1章[第20-21節]で、中間の諸階層を上昇するように数え上げているのであり、神は彼、すなわちキリストを「天上において自らの右に座らせ、すべての支配と権能と力と主権の上に」置いた、と言っている。この箇所では「力」は「権能」と「主権」の間に置かれており、ディオニュシウスの割当に一致している。また、『コロサイ信徒への手紙』第1章[第16節]では、同じ諸階層を下降するように数え上げているのであり、「王座も主権も支配も権能も皆、彼(キリスト)によってかつ彼において創造された」と言っている。この箇所では「支配」は「主権」と「権

能」の間に置かれており、グレゴリウスの割当に一致している。⁶¹

要約すれば、両者の相違は聖書の引用箇所の違いに拠る、という見解である。ここでトマスは両説を聖書という一つの絶対的な源泉に帰せしめている。言い換えれば、聖書に依拠しているという点で、両説を平等なものとして扱っているのである。さらにトマスは、引用箇所についてそれぞれ緻密な考察を行う。そして、両説共に整合性がある、という結論を導く。その根拠についてトマスは次のように述べる。

ひとがディオニュシウスおよびグレゴリウスに即した諸階層の指定を厳密に考えてみたならば、ことがらに関しては、ごく僅かにしか、あるいは全く、差異を見出せないであろう。つまり、こうである。グレゴリウスは「支配」の名称を「善き霊たちの先頭に立つ」ことに基づいて解釈しているものであり、このことは「力」にも適合しているのであるが、それは「力」という名称において下位の霊たちに神的な奉仕を遂行するための有効性を与えるという力強さが理解されることに即している。さらに、グレゴリウスの「力」は、ディオニュシウスの「支配」と同じものであると考えられる。というのは、奇蹟を為すことは神的な奉仕における第一のものだからである。実際、このことによって「大天使」や「天使」の持ち前である告知への道が開かれるのである。⁶²

上記のトマスの回答は、言葉の上では相違があるにしても、ことがら(内実)において両者は全く同じ内容を語っている、というものである。つまり、大グレゴリウスと擬ディオニュシオスの相違は「支配」と「力」の入れ替わりにあるが、大グレゴリウスの「支配」は擬ディオニュシオスの「力」と同じことがらを語っており、また大グレゴリウスの「力」は擬ディオニュシオスの「支配」と同じことがらを語っているの

であるから、二人は実質的には同じ序列を語っている、という調停的解決である。

第7項および第8項は、問題提起にあたって同一のことが暗に意識されていると考えられる。それは階層およびヒエラルキアの「境界」ないし「限界」である。すなわち、天使の階層の区別は「いつまで」続くのか、天使の階層と人間の階層の「境」は例外的にでも超えられることはあるのか、といった天使の階層の限界線を探る問いがこれらの頃の主題なのである。第7項は、天使の階層が彼らの任務に即して分かたれているのであれば——この伝統的な見解をトマスは第2項で認めている⁶³——人間の救済という目的が果たされた終末においてはもはや階層の区別など無いのではないか、という問いより生じた問題だと推測される。ここから発せられる複数の問いに対してトマスは、人間を救いに導くという目的が果たされた暁にも、依然として人間を導く(照明する)という天使の自然本性的な働きは存続するのであり、段階の区別も残り続ける、と答える⁶⁴。第8項は、人間が天使の一員となることはありうるのか、という問題である。聖書には復活に際して人間は天使の如くなるという記述があるため(『マタイによる福音書』22:30)、当然ながらトマスの立場は「ありうる」というものである。自然本性においては人間が天使の階層へ上昇することはないが、恩寵においては上昇することがある、というのが彼の回答である⁶⁵。

第7項および第8項の議論は、擬ディオニュシオスとも大グレゴリウスとも異なった問題意識に基づくものである(ゆえに、こう言って良ければ、擬ディオニュシオスが「神化」を、大グレゴリウスが「悔悛」をそれぞれ位階論の個性としていたように、ここにトマスの位階論の個性が現れているとも解釈できる)。これらの主題をトマスが扱ったのは、ロンバルドゥスの『命題集』の影響であると考えられる。というのは、これらの主題に類するものが『命題集』およびそのトマスの註解で既に扱われているからである⁶⁶。むろん、トマスはこれらの問題を教父たちの教えから独立したものとして考えていたわけではない。そのことは彼が註解の同議論において擬ディオニュシオスらの言説を多く取り挙げている

ことから明らかである。ゆえに、これらの項はトマスおよび彼の時代が新たに創り出した問題というよりはむしろ、教父たちの教えが有する意味内容を拡張するかたちで加えられた問題と見るべきであろう。

以上がトマス・アクィナスにおける天上位階論の概要である。それは次のように纏めることができる。天使たちの序列を焦点としたトマスの天上位階論は、用語を始めとして、基本的には擬ディオニュシオス説に傾倒している。アリストテレスや教父の名が挙がるにしても(彼らの影響が確かに見受けられるにしても)、それは論証のための道具立てであって、あくまでも中心軸は擬ディオニュシオスである。とはいえ、第6項の議論では大グレゴリウスが擬ディオニュシオスに等しい権威として並置され、トマスは両説の調停に努めている。さらに第7項と第8項では自身の(時代の)問題意識に即した議論にも取り組んでいる。従って、内容の全体を鑑みれば、トマスの天上位階論は単なるディオニュシオス主義の産物ではなく、聖書の言葉を根底に据えつつ、擬ディオニュシオス説と大グレゴリウス説の総合を企図し、更にその先——概念の持つ射程ないし豊かさの拡張——を目指したものである。

おわりに

本稿では、西洋中世における天上位階の起源と展開について、古代から13世紀までを通史的に概観してきた。オリゲネスの聖書解釈に端を発する天上位階論は、時を経るに従って次第に「九つの階層」へと収束してゆき、中世初期には擬ディオニュシオスと大グレゴリウスという東西の教父が「九つの階層」より成る天上位階をそれぞれ提唱するに至る。両者の天上位階には、序列の相違に加えて、擬ディオニュシオスは「神化」を、大グレゴリウスは「悔悛」を、それぞれ位階論の目的に据えるという違いが存していた。西洋中世における以降の受容史を見ると、当初は西方の教皇である大グレゴリウスの影響が大きかったが、次第に擬ディオニュシオス受容が本格化

し、13世紀には擬ディオニシオスが天上位階論の支配的な権威となるという変遷が窺える。このような経緯を経て両権威が並存するようになった状況下で、トマス・アクィナスは両権威の説を調停する立場で、なおかつ時代に即した新たな問題を取り込むかたちで、自身の天上位階論を展開した。これが本稿において確認してきた天上位階論史の梗概である。

中世における天上位階論を通史的に眺めていったならば、そこには二つの透徹した精神が確かに認められる。一つは伝統に忠実であろうとする精神であり、いま一つは伝統を刷新しようとする精神である。この二つの精神が決して矛盾・対立するものでないことは、本論で辿ってきた天上位階論史が証明している。聖書という一つの源泉から二つの権威的な説が生まれ、両説が互いを排斥することなく並存し、新たな説を生み出す地盤となっていったのも、伝統に倣いつつ新たな言葉で伝統を語り継ごうとする精神の所以なのである。本論の考察をふまえて、以上のように結論することができるだろう。

(註)

- 1 本稿で一次資料として参照した文献は以下の通りである(一次資料の欧米現代語訳は割愛)。
Thomas Aquinas, *S. Thomae Aquinatis Summa Theologiae*, Pars Prima et Prima Secundae, cum Textu ex Recensione Leonina, Cura et Studio Sac. Petri Caramello, Marietti Editori, Italy 1952.(トマス・アクィナス『神学大全』第8巻、高田三郎、横山哲夫共訳、創文社、1962年)
———, *Scriptum super Libros Sententiarum*, Editio nova cura R. P. Mandonnet, O. P., tomus II, Parisiis 1929.
Pseudo-Dionysius Areopagita, *De Coelesti Hierarchia*, Corpus Dionysiacum II, Gunter Heil und Adolf Martin Ritter (hrsg.), De Gruyter, Berlin/New York 1991.(ディオニシオス・アレオパギテス「天上位階論」今義博訳、『中世思想原典集成3 後期ギリシア教父・ビザンティン思想』所収、上智大学中世思想研究所、1994年)
———, *De Ecclesiastica Hierarchia*, ibid.
Gregorius Magnus, *Homiliae in Evangelia*, Corpus Christianorum(以下CC.) 141, Brepols, Turnhout 1991.(グレゴリウス一世『福音書講話』熊谷賢二訳、キリスト教古典叢書16、創文社、1995年)
Origène, *Traité des Principes*, tome I(Livres I et II), Sources Chrétiennes(以下SC.) 252, Les Éditions du Cerf, Paris 1978.(オリゲネス『諸原理について』小高毅訳、キリスト教古典叢書9、創文社、1978年)
Hieronymus, *Contra Joannem Hierosolymitanum ad Pammachium*, J.

- P. Migne(ed.), *Patrologia Latina*(以下PL.)23.
Ambroise de Milan, *Apologie de David*, SC. 239, Les Éditions du Cerf, Paris 1977.
Cyrillus Hierosolymitanus, *Cathecheses Mystagogicae*, J. P. Migne(ed.), *Patrologia Graeca*(以下PG.)33.
Joannes Chrysostomus, *Homiliae in Genesin*, PG. 53.
Gregorius Nyssenus, *Gregorii Nysseni In Canticum Canticorum*, Gregorii Nysseni Opera, vol. VI, E. J. Brill, Leiden 1986.(ニュッサのグレゴリオス『雅歌講話』大森正樹ほか訳、新世社、1991年)
Isidorus Hispalensis Episcopus, *Isidori Hispalensis Episcopi Etymologiarum sive Originum*, lib. XX, tomus I, Oxford University Press, American Branch, 1911.
———, *Sententiae*, CC. 111.
Eriugena, *Expositiones super Ierarchiam Coelestem S. Dionysii*, PL. 122.
Hugo de S. Victore, *Commentariorum in Hierarchiam Coelestem S. Dionysii Areopagitae*, PL. 175.
Bernard de Clairvaux, *De Consideratione*, Sancti Bernardi Opera, Editiones Cistercienses, Roma 1963.
Petrus Lombardus, *Sententiarum Libri Quatuor*, Opera Omnia, tomus II, PL. 192.
Albertus Magnus, *Super Dionysium De Coelesti Hierarchia*, Sancti Doctoris Ecclesiae Alberti Magni, ordinis fratrum praedicatorum episcopi opera omnia, Paulus Simon et Wilhelmus Kübel(ed.), Germany 1993.
- 2 『神学大全』におけるトマスの天使論は、その主題に即して大きく二分される。一つは第1部第50-64問題であり、いま一つは第1部第106-114問題である。前者は天使の存在論が主題とされており、後者は天使の秩序論が主題とされている。
 - 3 天上位階の「位階」は、今日では擬ディオニシオスの術語ヒエラルキア(希: *ἱεραρχία* 羅: *hierarchy*)の訳語とする、つまりヒエラルキーという概念の下に理解するのが通常である。しかし本稿では擬ディオニシオスの影響が浸透する以前の時代も扱っているため、位階という言葉とヒエラルキアという言葉を使い分けている。本稿では、字義通り位階的な秩序概念のすべてを位階として表記しており、擬ディオニシオスのヒエラルキア概念を強く含意する場合にはそのままヒエラルキアと表記している。
 - 4 トマスは基本的に天上位階論を「天使間の相互の秩序」についての問題として位置付けており、『神学大全』における問題配置もそれに則ったものである。なお、彼は他の主要著作でも同問題を扱っており、それは以下の箇所である。『対異教徒大全』*Summa contra Gentiles*第3巻第79-80問題、『命題集註解』*Scriptum super Libros Sententiarum*第2巻第9区分、『神学綱要』*Compendium Theologiae*第125-126章。
 - 5 日本語の「天使」は、ギリシア語 *ἄγγελος*(アγγελロス)およびそれに由来する西洋諸語の訳語であるが、このアγγελロスというギリシア語は、元来は「使者・メッセンジャー」を意味する一般的な言葉であり、宗教的(霊的)中間者の指示に限定されていない。もっとも、キッテル新約聖書辞典によれば、ホメロスからして既に「聖なる使者」という含意はあり、またヘルメスとの関連から「天よりの使者」という用法もギリシア語聖書以前に既にこの言葉にはあったとされている(Cf. Gerhard Kittel(ed.), Geoffrey W. Bromiley(tr.), *Theological Dictionary of the New Testament*, vol. I: *α-γ*, Wm. B. Eerdmans Publishing Co., United States of America 1964, pp. 74-76)。ともあれ、ギリシア語 *ἄγγελος*にせよラテン語 *angelus*にせよ、これらの語は本来的には存在者の使者的性格を言い表す言葉であって、存在の霊的性格を示す語ではないという点には注意が必要である。
 - 6 後代で言われるような体系的天上位階論は聖書に記されていないが、天上位階という概念に直接繋がるような記述は聖書にも散見さ

- れる。たとえば、パウロが証言するところの「第三の天」(『コリントの信徒への第二の手紙』12:2)やヤコブの夢に出てくる「天使の梯子」(『創世記』28:12)がそうである。また、「(天使)長」princeps(『ダニエル書』10:13等)という表現からも窺えるように、天使の軍隊的・階級的表象は旧約聖書の時代より既に定着していたと考えられる。従って、思想的源泉としては確かに見出されるのであるから、聖書に天位階層の概念は皆無であるとまでは必ずしも言えない。
- 7 オリゲネスにとって寓意的解釈とは、ごくわずかな人々には明かされているがすべての人には明白でないところの、聖書の言葉のうちに隠された「霊的な意味」を理解するための聖書釈義法である。従って、彼の釈義は「使徒たちから受け継がれ、守り継がれ、今に至るまで教会の内に保たれている教会の教え」ないし「教会的・使徒的伝承」がその基準となっている(小高毅「オリゲネス」創文社、1984年、116-123頁)。
- 8 *De principiis*, lib. I, cap. 5, 1.(邦訳、89-90頁)
- 9 本稿では、同じ聖書箇所を典拠とする天使の位階について、原語(ギリシア語およびラテン語)と訳語との対応を次のように統一している。
- セラフィム：Σεραφίμ, Seraphim (Seraphim)
 ケルビム：Χερουβίμ, Cherbin (Cherbin)
 王座：Θρόνοι, Throni (Sedes)
 主権：Κυριότητα, Dominationes
 力：Δυνάμεις, Virtutes
 権能：Ἐξουσία, Potestates
 支配：Ἀρχαί, Principatus
 大天使：Ἀρχάγγελοι, Archangeli
 天使：ἄγγελοι, Angeli
- 10 この点については同巻第8章にも詳しい記述がある。Cf. *De principiis*, lib. I, cap. 8.(邦訳、111-116頁)
- 11 *Ibid.*, lib. I, cap. 5, 2.(邦訳、90-91頁)
- 12 *Contra Joannem Hierosolymitanum ad Pammachium*, lib. I, 17: Cf. Origenes, *De principiis*, lib. I, cap. 5: 8.
- 13 *Apologia David*, 5, 20.
- 14 Andrew Louth, *Denys the Areopagite*, Morehouse-Barlow, North America 1989, p. 36.
- 15 *Ibid.*, loc. cit.
- 16 それぞれが挙げる天使の名は次の通り(名の並びはテキストの記載順)。エルサレムのキュリロス：天使、大天使、力、主権、支配、権能、王座、ケルビム、セラフィム(*Catechesis* XXIII, *Mystagogica* V)。ヨハネス・クリュストモス：天使、大天使、力、王座、主権、支配、権能、ケルビム、セラフィム(*Homiliae in Genesis*, 4, 5)。ニュッサのグレゴリウス：権能、主権、王座、支配、力、セラフィム、ケルビム、[奉仕者](*In Canticum Canticorum*, oratio XV)。
- 17 *In Canticum Canticorum*, oratio XV.(邦訳、365頁)
- 18 擬ディオニュシオスの歴史上の人物像に関する研究史については次の文献を参照。ルイ・ブイエ「キリスト教神秘思想史 I 教父と東方の霊性」上智大学中世思想研究所翻訳監修(大森正樹ほか訳)、平凡社、364-370頁。
- 19 『使徒言行録』17:34。
- 20 熊田陽一郎「ディオニュシオス・アレオパギテス」(解説)、『キリスト教神秘主義著作集』所収、教文館、2004年、382頁および同解説註18を参照。
- 21 次の文献を参照。大月栄子「偽ディオニシオス・アレオパギテスにおける魂の神への上昇とヒエラルキア」『中世哲学研究 Veritas』第27号、2008年、20頁；ディオニシオス・アレオパギテス「天位階論」今義博訳、『中世思想原典集成 3 後期ギリシア教父・ビザンティン思想』所収、上智大学中世思想研究所、1994年、「解説」、348頁。
- 22 *De Coelesti Hierarchia*, cap. 3, 1, 164D.(邦訳、365頁)
- 23 *Ibid.*, cap. 3, 2, 165A.(邦訳、366頁)
- 24 *Ibid.*, cap. 3, 2, 165C.(邦訳、367頁)
- 25 『天位階論』の第7章から第9章までが九つの階層に付せられた個々の名の意味についてである。また、ヒエラルキア自体の説明に割かれている第1章から第3章までを除けば、最後(第15章)に至るまでのすべてが天使の階層の名についての考察となっている。
- 26 *Enchiridion*, 58.
- 27 *De Coelesti Hierarchia*, cap. 6, 1, 200C.(邦訳、374頁)
- 28 *Ibid.*, cap. 6, 2, 200D.(邦訳、374-375頁)
- 29 *Ibid.*, cap. 6, 1-2: Cf. Andrew Louth, *op. cit.*, pp. 28-29.
- 30 Cf. *De Coelesti Hierarchia*, cap. 7-9.(邦訳、375-390頁)
- 31 *De Mystica Theologia*, cap. 3.
- 32 *Ibid.*, loc. cit.
- 33 教会のヒエラルキアは、天上のヒエラルキアと同様三組に分割されている。それは次の通りである。第一のヒエラルキア：照明(洗礼)、集会、香油。第二のヒエラルキア：司教、司祭、助祭。第三のヒエラルキア：修道士、受洗者、聖書の学びの途上にある者たち(洗礼志願者、求道者、悔悛者)。なお、これら三組に加えて、死(葬儀)についての議論も教会のヒエラルキアに割り当てられている。
- 34 大グレゴリオスの生涯および時代背景については次の文献を参照。ピエール・リシェ『大グレゴリウス小伝－西欧中世世界の先導者－』岩村清太訳、知泉書館、2013年；R. A. Markus, *Gregory the Great and his World*, Cambridge University Press, United Kingdom 1997.
- 35 『福音書講話』は教皇就任直後の二年間に聖堂で行った講話を書物として纏めたものである。グレゴリウス一世『福音書講話』熊谷賢二訳、上智大学神学部編、創文社、1995年、「序言」4頁を参照。
- 36 『福音書講話』第34講話は18に分節されており、第1-6節が「見失った羊」と「無くした銀貨」のたとえの概要を解説しており、第7-14節が天使論、第15-18節が悔悛についての議論となっている。
- 37 *Homiliae in Evangelia*, 34, 3, 6.(邦訳、206-207頁、210頁)
- 38 『申命記』32:8の引用で、大グレゴリウスは「神の天使の数」numerus angelorum Deiと記述している箇所は、ウルガタ訳聖書では「イスラエルの子らの数」numerus filiorum Israhelとなっている。
- 39 大グレゴリウスがどの程度擬ディオニュシオスの影響を受けていたのかについては意見が分かれるところである。ルクレールは「最新の研究では、しかしながら、歴史的背景と文脈から視たならば、彼の言明(ギリシア語を知らないという大グレゴリオスの自己規定)は文字通りに捉えるべきではないということが示されている」(Jean Leclercq, "Influence and noninfluence of Dionysius in the Western Middle Ages", *Pseudo Dionysius: The Complete Works*, 1987, p. 26)と述べており、大グレゴリウスは擬ディオニュシオスを一定程度理解していたとしている。対してラウスは、擬ディオニュシオス研究の立場から、「かなり難解なアレオパギテスのギリシア語を扱うには、彼にとってそれ(ギリシア語の知識)はほとんど十分ではなかった」(Andrew Louth, *op. cit.*, p. 120)と見做している。
- 40 *Homiliae in Evangelia*, 34, 12.(邦訳、217頁)
- 41 *Ibid.*, 34, 9(邦訳、212-213頁)；Cf. Hieronymus, *Liber de Nominibus Hebraicis*, De Numerorum Libro, Michael; Lucae, Gabriel.
- 42 二つのたとえと天位階論の関係について、他の教父からの影響関係を確定することは難しい。内容の類似から考えるならば、「見失った羊」と「失った銀貨」のたとえ話から天位階に触れる展開はアンブロシウスの「ルカによる福音書註解」*Expositio Evangelii secundum Lucam*(cap. 7)に萌芽が見出せるし、天位階論が救済論と連動しているのは擬ディオニュシオスも同様である。大グレゴリウスが彼らから影響を受けた可能性は十分に考えられる。
- 43 12世紀頃をターニングポイントとして擬ディオニュシオス説が支配的になるという見方は、ラウスやラスカムなどが共通して主張するところである。以下の文献を参照。A.ラウス「キリスト教神秘思想

- の源流 プラトンからディオニシオスまで』水落健治訳、教文館、1981年、267頁; D.E.ラスカム「位階制」井澤清訳、A.S.マクグレイド編著『ケンブリッジ・コンパニオン 中世の哲学』所収、川添信介監訳、京都大学学術出版会、2012年、90-93頁。
- 44 *Etymologiae*, lib. VII, 5, “De Angelis”; Cf. *Sententiae*, 10, 15.
- 45 イシドゥルスの天上位階論に新しい点が無いわけではない。大天使の解説において大グレゴリウスの言及しなかったウリエルの名を挙げる、セラフィムと天地創造および三位一体論を関連付けて説明する等、概して天使の諸名の意味についてはイシドゥルスの方がより詳しい説明を行っていると言える。
- 46 西方における最初期のディオニシオス文書受容については以下の文献を参照。ディオニシオス・アレオバギテス「天上位階論」今義博訳、前掲書、「解説」、342頁; Andrew Louth, *op. cit.*, p. 121.
- 47 詳しくはヒルドゥイヌスの著した『聖ディオニシオスの生涯』*Sancti Dionysii Vita*を参照(邦訳は『中世思想原典集成 6 カロリング・ルネサンス』、上智大学中世思想研究所、1992年に一部所収)。
- 48 既存のディオニシオス文書の翻訳・註解については、熊田陽一郎「ディオニシオス・アレオバギテス」(解説)、『キリスト教神秘主義著作集』所収、教文館、2004年、391-393頁で整理されている。これによれば、中世におけるディオニシオス文書のラテン語訳は次のものがある。ヒルドゥイヌス訳(830年頃)、エリウゲナ訳(860年)、サラセヌス訳(1167年)、グローステスト訳(1235-45年)。
- 49 Paul Rorem, “The early latin Dionysius: Eriugena and Hugh of St. Victor”, *Modern Theology*, vol. 24: 4 (2008), pp. 602-604.
- 50 *Ibid.*, pp. 604-608.
- 51 “Hierarchia ex Graeco interpretata sacer dicitur principatus.” (*Commentariorum in Hierarchiam Coelestem S. Dionysii Areopagitae*, lib. I, cap. 5)
- 52 このスコリアはミーニュ全集のディオニシオス巻(ギリシア教父、第4巻)で確認できる。なお、ミーニュ全集所収のスコリアはヨアンネス・スキュトポリスのものに証聖者マクシモスの加筆が加えられた版であり、元々のスコリアを明らかにする研究は現在進行中である。『神名論』*De Divinis Nominibus*の校訂版スコリアは次の文献で既に出版されている。B. R. Sucha(hrsg.), *Corpus Dionysiacum*, Band 4, 1, *Ioannis Scythopolitani Prologus et Scholia in Dionysii Areopagitae librum De divinis nominibus cum additamentis interpretum aliorum*, De Gruyter, Berlin/Boston 2011.
- 53 *De Consideratione*, lib. V, 4.
- 54 *Ibid.*, loc. cit. この箇所は『ローマ信徒への手紙』10: 17に由来する。
- 55 *Libri Quattuor Sententiarum*, lib. II, dis. 9.
- 56 D.E.ラスカム、前掲書、91-93頁を参照。
- 57 *La Divina Comedia, Il Paradiso*, canto XXVIII.
- 58 トマスの生涯については本論で割愛しているが、次の文献に詳しい。稲垣良典『トマス・アクィナス』講談社学術文庫、1999年、76-237頁。
- 59 “De ordinatione angelorum secundum hierarchias et ordines.” ここでトマスは天上位階に関して彼が重要だと見做す三つの概念を提示している。それは「ヒエラルキア」*hierarchia*と「階層」*ordines*と「序列」*ordinatio*である。この主題の言い方からして既に、トマスが天上位階をどのように論じようとしているのかは明白である。すなわち、天上位階は——ヒエラルキアと階層という語に複数形が用いられていることから——複数のヒエラルキアと複数の階層によって序列が定められている、ということが章題で予告されているのである。
- 60 *Summa Theologiae*, I, q. 108, a. 1, arg. 1; cor.(邦訳、107-108頁)
- 61 *Ibid.*, I, q. 108, a. 6, cor.(邦訳、130-131頁)
- 62 *Ibid.*, I, q. 108, a. 6, ad 4.(邦訳、135-136頁)
- 63 *Ibid.*, I, q. 108, a. 2, cor.(邦訳、112-113頁)
- 64 *Ibid.*, I, q. 108, a. 7, cor.(邦訳、137-138頁)
- 65 *Ibid.*, I, q. 108, a. 8, cor.(邦訳、140-141頁)
- 66 Petrus Lombardus, *Libri Quattuor Sententiarum*, lib. II, dis. 9, 7-8; *ibid.*, dis. II, 6; Thomas Aquinas, *Scriptum super Libros Sententiarum*, lib. II, dis. 9, q. 1, a. 8; *ibid.*, dis. II, q. 2, a. 6.

下園 知弥(しもぞの ともや) 京都大学大学院文学研究科思想文化学専攻西洋中世哲学史専修